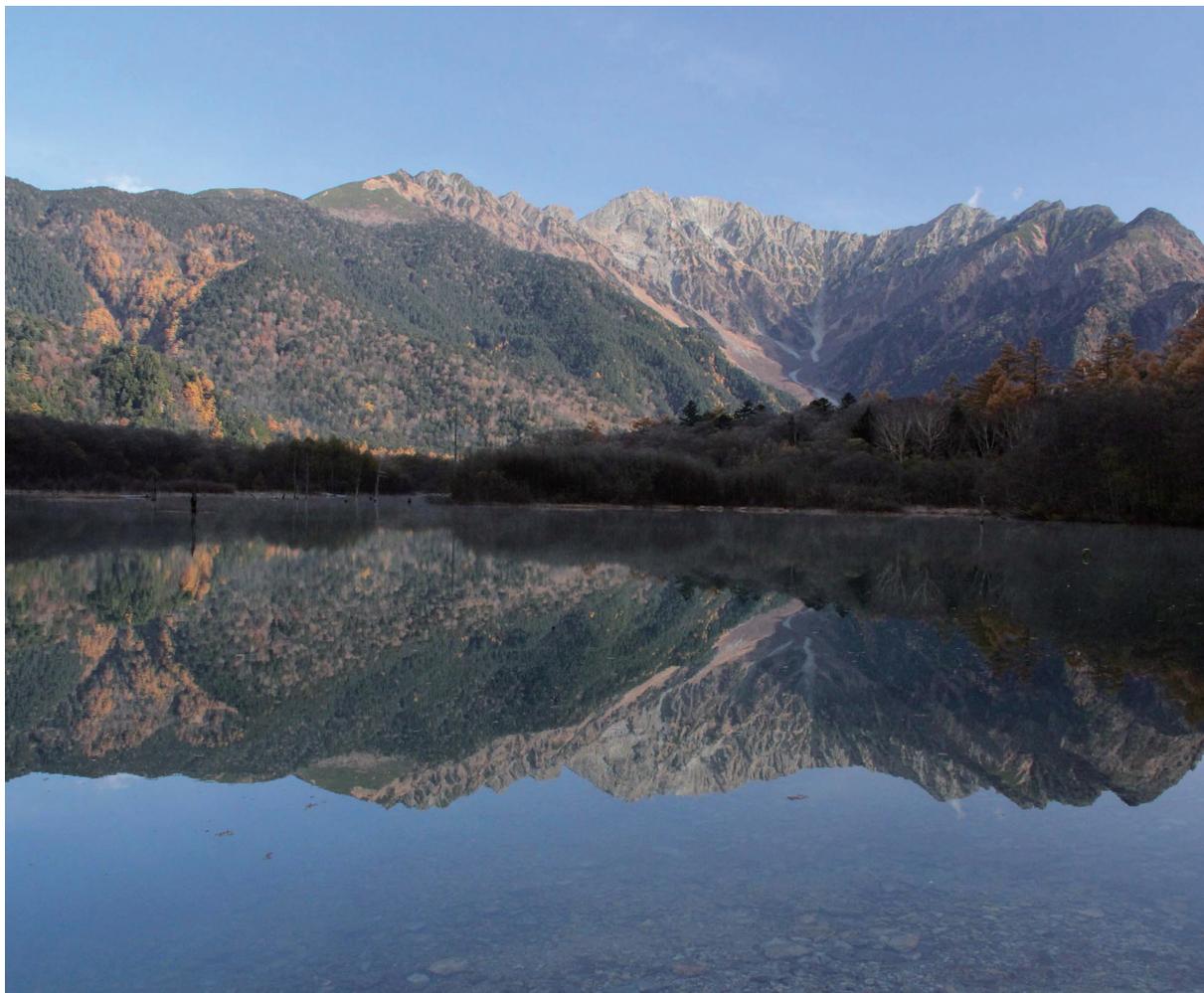


# 愛知医科大学 学報



上高地（大正池）からの穂高連峰  
（写真提供 看護学部 衣斐達教授）

＝ 第144号 ＝

2016. 10月

愛知県長久手市岩作雁又1番地1

〒480-1195

学校法人 愛知医科大学

愛知医科大学ホームページアドレス

[www.aichi-med-u.ac.jp](http://www.aichi-med-u.ac.jp)

## ■ 主な目次 ■

平成28年度総合防災訓練実施……………	2
平成29年度予算編成方針……………	3
平成29年度採用事務職員内定式挙行……………	5
平成29年度大学院入試……………	7
寄附講座の設置……………	8
コンケン大学医学部短期留学体験記……………	12
教育・研究最前線……………	26
海外研修派遣研修記……………	33
新シリーズ「スマイル」……………	36

## 平成28年度総合防災訓練実施

学校法人愛知医科大学消防計画第69条に基づき、平成28年10月20日（木）に教職員、学生を始め、近隣の医療機関及び長久手市消防本部など関係機関を含む約1,000人の参加協力を得て、平成28年度総合防災訓練を実施しました。

訓練は、午後2時に南海トラフ地震でマグニチュード9.0、長久手市で震度6強の地震を観測し、病院機能は一部麻痺しているものの、患者受け入れは可能との想定の下で行われました。

訓練種別としては、全職員を対象とした本部共通訓練と個別訓練参加者を対象とした部門個別訓練に区分けし、実施されました。本部共通訓練では、各部署から職員参集状況報告書、被害状況報告書、入院患者状況報告書等の提出及び安否確認を行いました。勤務中とあって回答期限を翌日の9時まで設けましたが、安否状況の確認は、残念ながら回答率55.4%と低調な結果となりました。

医学部、看護学部災害対策室の個別訓練では、学生の避難誘導訓練及び災害に係る講演を実施しました。講演では、津島市民病院から救急医療部長の松永宏之先生をお招きして、災害医療に関する興味深いお話を頂き、学部学生たちは真摯に聞き入っていました。法人本部災害対策室では、実際に非常用発電機及び非常用浄水システムを本番さながら稼働させ、見学者を驚かせるとともに電気、水に対する安全性を確認しました。その他病棟調査、患者搬送訓練、初期消火訓練などの訓練を現実に即して実施しました。

病院災害対策室では、昨年に引き続き、図上訓練を実施しました。今回は、昨年の反省から訓練開始前に30分程度の事前説明会を行いました。各参加者が初動時にスムーズな動きができるようにマニュアル等の整備の必要性を感じました。

訓練後の検証会では、多くの本部員から様々なご意見が挙げられ、新たな課題が見つかりました。こうした課題を解決し、いざという時に役立つ訓練としていくため、今後もより一層実効性のある訓練の実施に努めて参ります。



災害対策本部



図上訓練



防災訓練の様子

## 平成29年度予算編成方針

平成29年度予算編成については、次の編成方針に基づき編成するものとする。

平成18年5月の新病院建設委員会設置以来、全学を挙げて推進してきたところの新病院を本丸とするキャンパス再整備事業は、平成29年12月の立石池外周道路拡幅工事の竣工を以って完了し、本学の力量を披露する舞台はいよいよ整います。こうして迎える平成29年度は、充実した病院機能を最大限に発揮し、医療収益を着実に拡大、最大化するための施策の展開が求められています。また、教育面では、日本医学教育評価機構（JACME）による医学教育分野別評価受審に向け、教育の質を高め、国際基準を踏まえた医学教育プログラムの提供をしていかなければなりません。更に研究面では、本学にいる価値を高め、研究者のモチベーションが上がる効率的な支援等に注力し、大向こうを唸らせる実力の蓄積を目指します。

私学経営を取り巻く外部環境を見渡すと、18歳人口は現在の約120万人が平成32年頃まではほぼ横ばいで推移するものの、平成33年頃からは減少局面に入ると見込まれています。大学への進学率を見ると、平成21年度に50%を超えて以来微増が続きましたが、平成27年度は51.5%に留まり、私立大学579校の入学定員充足状況は、入学定員未充足校が250校（43.2%）となっています。また、充足率80%以上の大学は465校（80.3%）という実績を踏まえ、今後、医科大学だけは例外と言える保証はどこにもありません。いよいよ存続に向けた競争が本格化しますが、本学は勝ち抜かねばなりません。

本学では、平成29年度医学部入学生の学納金の減額を発表しました。消費税率10%の引き上げは先延ばしされましたが、平成29年度は、舞台整備に充てた借入金の返

済ピークを迎えます。厚生労働省の地域医療包括ケアシステムなど医療費抑制施策等への対応も求められます。こうした財政負担を賄うには、事業活動収支差を確保していく必要があります。それには舞台を活用した収入増を図る一方で支出予算の適正化と効率化を一層進める必要があります。

来る平成29年度は、新病院開院4年目となります。引越し等の影響もあって初年度の医療収入は足踏みしましたが、2年目からは着実に実績を上げてきました。しかし、当初想定していなかった課題も顕在化してきており、これを解決しなくては先の展開は開けません。そこで、これまでの3年間を振り返り、詳細に評価、更に改善策を検討する必要があることから、具体的な改善策の策定と効率的で高収益体質の構築につながる事業を最優先し、複数年にわたり未執行の事業は白紙とし、既存の財政支出は、ゼロベースで事業項目の見直しと効率化を図ることとします。こうしたレビューをする中であっても眼は将来に向け、世界で活躍する医療人の育成を図るとともに、研究推進のための競争的資金の獲得支援、研究活性化を図るといった方策については積極的に展開していくこととします。

平成29年度予算編成は、資金収支予算ベースでは経済変動の影響を柔軟に受け止めるとともに、いざというときの瞬発力となる繰越支払資金の具体的な目標金額を50億円とし、事業活動収支予算ベースでは、特殊要素（新規減価償却費分他）を除き、黒字予算の幅を上げ5億円以上の確保を図ることとします。

## 平成28年度愛知医科大学公開講座終了

平成28年9月3日（土）・10日（土）・17日（土）・24日（土）の計4回にわたり開催された、平成28年度愛知医科大学公開講座が終了しました。

今年度の公開講座は、身近な病気や大規模災害時の対処法について学んで頂くため「学んで守ろう自分の身体」というテーマで開催し、開催期間中は、近隣住民の方を始め、4日間で延べ838名の方々にご参加頂きました。

また、4日間全てに出席頂いた110名の方々には、最終日となる24日の講座終了後の閉会式において、それぞれ修了証書が授与されました。

本学では、来年度も地域の方々の方に役立つ公開講座を企画・運営していきますので、多くの方のご参加をお待ちしております。



## わくわく体験リニモツアーズ 「“コードブルー”の世界 救急医療について学び、 考えてみよう！」開催

東部丘陵線（リニモ）の沿線施設の魅力を満喫し、学び楽しむイベント「わくわく体験リニモツアーズ2016」（東部丘陵線推進協議会主催）が、近隣に住む中学生以下の児童を対象に開催されました。

本学においても、平成28年8月8日（月）、9日（火）の2日間で「“コードブルー”の世界 救急医療について学び、考えてみよう!!」と題した体験講座を開催し、多くの児童及びご父兄にご参加頂きました。

体験講座では、ドクターヘリの見学会、ドクターヘリに関する講演会、質疑応答が行われましたが、幸いにも全日程でドクターヘリの見学会も実施することができ、参加者は機体の迫力を間近で感じていました。

講演会では、本院救命救急科の医師及び看護師による講演会がクイズ形式で行われ、ドクターヘリやフライトドクター・ナースの仕事についての説明がありました。参加者は皆、普段聞けない医療現場の話やドクターヘリの話について熱心に耳を傾けていました。

最後には、参加者全員にドクターヘリの特製ピンバッジが配布され、体験講座は盛況のうちに終了しました。



ドクターヘリ見学会



講演会

## 科学研究費助成事業執行方法等説明会開催

平成28年8月29日（月）・30日（火）・31日（水）の3日間、大学本館305講義室において、科研費（科学研究費助成事業）の学内説明会が開催され、123名の参加がありました。

この学内説明会は、今年度に科研費の補助事業者となっている研究代表者及び研究分担者を対象に、採択された科研費の制度に関する理解の向上と適正な執行を確保し、不正防止等の徹底を図ることを目的に毎年開催しているものです。

説明会では、総務部研究支援課の佐合範彦主事から、

年間のスケジュール、補助金制度と基金制度の相違点、ルール改正、学内執行ルール及び補助事業遂行に当たっての留意点等について説明がありました。また、最近の研究費不正使用に関する事例も紹介され、出席者に対して不正使用防止に向けた注意喚起がありました。

説明会終了後には、研究代表者及び研究分担者から、制度の内容や執行の方法等についての確認や相談があるなど、科研費の適正な執行と管理に向けて意義のある説明会になりました。

## 科学研究費助成事業獲得支援セミナー・応募方法等説明会開催

平成28年9月30日（金）・10月3日（月）・4日（火）の3日間、大学本館203講義室において、科学研究費助成事業応募予定者を対象とした科研費（科学研究費助成事業）獲得支援セミナー「科研費申請書作成のポイント」及び平成29年度科研費応募方法等説明会が開催され、81名の参加がありました。

このセミナーは、本学における研究者の支援を通じた科研費の申請・採択件数の増加を目的として開催されたもので、研究創出支援センター運営委員会委員の吉川和宏教授（特任）、鈴木進准教授、牛田享宏教授の3名から、今年出版された「科研費採択される3要素」（医学書院・

郡健二郎著）の出版記念セミナーの内容を中心に、申請書作成のコツなど有益な情報について講演がありました。

また、説明会は各日とも総務部研究支援課の佐合範彦主事から、申請方法や事務的な注意点について説明がありました。

説明会終了後には、出席した研究者から応募等に関する多くの質問・相談が寄せられるなど、大変意義あるセミナーとなりました。

本学では、今後も研究活動の一層の活性化と科研費を始めとする競争的資金の獲得を推進していきます。

## 長久手市火曜会例会開催

平成28年9月13日（火）本学において、第180回火曜会例会が開催されました。

火曜会は、長久手市内にある官公庁及び市に関連のある事業所等で組織され、会員相互の親睦を図り、業務の連絡の円滑化に資し、この地域の発展に寄与することを目的として昭和60年に設立されました。

当日は、会長の吉田一平市長から開会のあいさつがあった後、開催地を代表して三宅養三理事長から「医科大学として、今後地域医療に貢献するためには、地域の皆さんとのつながりは欠かせません。皆さんとの連携を更に深めて参りたい。」とあいさつがありました。続いて、会員紹介や各種報告が行われ、昼食を交えた懇談の後、施設見学が行われました。



本学を紹介する三宅理事長（中央）

施設見学では、中央棟の屋上ヘリポート、特別病棟及び地下の免震装置を視察し、それぞれの施設において、各担当者から説明がありました。

## 平成29年度採用事務職員内定式挙行

平成28年10月3日（月）午後3時から大学本館701会議室において、平成29年度採用事務職員内定式が挙行了されました。

式では、内定者14名に内定証書が授与された後、島田孝一法人本部長から「来年四月、皆さまを本学の職員として迎えるまで半年となりました。健康に留意され、学業をおろそかにすることなく、残りの学生生活を充実したものにしてください。瞳の輝きの増した皆さまと再会できることを心より祈念いたします。」とあいさつがありました。

続いて、内定者を代表して是木悟さんから「一日でも早く仕事を身に付け、愛知医科大学の力になれるよう精進していく所存です。至らぬ点も多く、お叱りを受ける



内定証書を受け取る内定者

こともあると思いますが、ご指導ご鞭撻の程よろしくお願ひします。」と答辞が述べられ、式は終了しました。

## 堀井愛知県副知事が本学を視察

平成28年10月21日（金）に堀井奈津子愛知県副知事、松本愛知県健康福祉部保健医療局長、近田医務国保課主幹等が来学され、本学の先進医療の実情を女性の活躍の視点から視察されました。【写真】

愛知県では「女性が元気に働き続けられる愛知」の実現に向けて推進しているプロジェクトの一環として、女性の活躍に積極的に取り組んでいる企業等の認証をしています。本学は今年7月29日付けで「あいち女性輝きカンパニー」に認証されています。

当日は、三宅養三理事長や佐藤啓二学長、島田孝一法人本部長等と意見交換後、保育所（アイキッズ）を皮切りに、がん治療関連部門や手術室、更には高度救命救急センターやドクターヘリなどを視察されました。実際に再診受付機（NAVIT）の誘導で診察室に入られたり、ドクターヘリは機内に乗り込む体験をされる等本学への理解を深めて頂きました。



## 訃 報

### 後藤峰弘教授（特任）（中央臨床検査部）御逝去



平成28年9月2日（金）に中央臨床検査部の後藤峰弘教授（特任）がご逝去されました。享年63歳でした。

後藤先生は、昭和53年3月に愛知医科大学医学部を卒業され、昭和59年6月に名古屋大学で医学博士

を取得されました。その後、昭和60年7月から愛知医科大学内科学第1助手、臨床検査医学講座助手、講師、准教授を経て、平成25年4月より中央臨床検査部の教授（特任）として診療、検査医学に関する卒前・卒後教育、代謝学及び臨床検査医学に関する研究を進められてきました。

研究においては、中枢性血糖調節とニューロン特性、

ネオスチグミンによる中枢性高血糖作用の機序、ネオスチグミンの脳室内投与における視床下部ノルアドレナリン作動性神経活性と肩甲骨間褐色脂肪組織の交感神経活性との関係、オクトレオチド脳室内投与によるストレス性高血糖の抑制効果、糖尿病外来における微量アルブミン尿の簡易測定試験紙によるスクリーニング等幅広い分野で研究を進められました。

本院では中央臨床検査部の運営だけではなく、臨床検査技師の教育・研究指導にも力を注がれてきたことは大きな功績です。また、臨床検査専門医の後進育成にも力を注がれ、専門医の中でも難関とされる臨床検査専門医が先生のご指導により誕生しております。

ここに哀悼の意を表し、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

## 訃 報

### 池谷俊郎主事（法人本部）御逝去



平成28年9月4日（日）に法人本部の池谷俊郎主事がご逝去されました。享年62歳でした。

池谷主事は、昭和52年3月に愛知大学経営学部を卒業し、同年4月に本学医学部附属病院事務部医事課主事として配属され、開設後

間もない附属病院において、病院医事業務を担当されました。その後、医事課長補佐、総務部総務課長補佐、法人本部法人課室長補佐を経て、平成10年4月に看護学部開設に向けた看護学部設置準備室長補佐に就任されました。看護学部開設に当たっては、看護専門学校の発展的閉校や学部開設に伴う膨大な事務業務の中心として、日々深夜に到るまで奔走されました。

平成12年4月からは、新設された看護学部教務学生部教学課長として、看護学部における教育カリキュラムの確立に取り組みされるとともに、大学院看護学研究科（修士課程）の設置にも精力的に取り組み、平成

21年6月には看護学部事務部長に就任されました。

平成24年7月に総務部へ異動した後は、総務部長として、大学評議会や大学評価など大学全体を通じた事務業務の取りまとめを始め、広報活動の充実に向けたホームページの全面リニューアル、公共交通機関としての名鉄バス導入など多岐にわたり尽力されました。

更に、医学情報センター事務長、アーカイブズ副室長、情報処理センター事務長、監査室長など多くの役職を兼任され、本学の歴史を知る知識人としてあらゆる場で活躍されました。

定年退職後は、一般財団法人愛知医科大学愛恵会の事務局長として、愛恵会の発展に寄与されました。

池谷主事の長年にわたる本学への貢献は計り知れないものであり、看護学部の礎を築かれた功績は多大なものであります。

ここに哀悼の意を表し、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

## 平成29年度大学院医学研究科入学試験 第65回論文博士外国語試験実施

平成28年10月7日（金）大学本館303講義室において、大学院医学研究科入学試験及び第65回論文博士外国語試験が行われました。合格者数は、大学院医学研究科が18名、論文博士外国語が5名となりました。

このため、本研究科では、まだ入学定員に満たないことから、第2次募集を予定しています。

また、これまで社会人入学制度や学納金減免制度の拡

充などを行い、大学院教育を受けやすい環境を整えてきましたので、研究意欲の高い方が多数応募されることを期待しています。

なお、大学院医学研究科入学試験（第2次募集）及び第66回論文博士外国語試験は、平成29年2月10日（金）に実施予定です。

## 平成29年度大学院看護学研究科入学試験実施

平成28年9月7日（水）大学院看護学研究科入学試験が行われました。合格者数は、修士論文コースが2名、高度実践看護師（診療看護師）コースが6名となりました。

このため、本研究科では、まだ入学定員に満たないことから、第2次募集を予定しています。

本研究科では、これまで医療等の現場で活躍されている方々が、退職したり休職したりすることなく学べるよう、平日の夜間や土曜日などにも講義、研究指導等を行っています。更に、勤務や育児などの事情により標準修業年限での履修が困難な学生を対象とした「長期履修制

度」を導入し、社会人がより学びやすい教育環境を整えています。（高度実践看護師（診療看護師）コースを除く。）

なお、大学院看護学研究科入学試験（第2次募集）は、平成29年2月8日（水）に実施予定です。

### 【看護学研究科入学試験結果】

○志願者	11名
○受験者	11名
○合格者	8名

## 平成28年度看護実践研究センター 認定看護師教育課程入学式挙行

平成28年9月5日（月）午前10時から医心館1階多目的ホールにおいて、看護実践研究センター認定看護師教育課程の平成28年度入学式が挙行されました。【写真】

式は、開式の辞に続き、感染管理分野24名及び救急看護分野15名の新入学生が紹介された後、新入学生を代表して、感染管理分野入学生の今井菜穂子さんから「課程設置規程並びに諸規則等を守るとともに、認定看護師を目指す学生としての本分を尽くすことを誓います。」と宣誓が行われました。

次いで、多喜田恵子センター長から「専門的な知識、技術を学ぶことはもちろんのこと、共通科目をしっかり学び、他者へ伝える能力をより高めて頂きたい。本学の教育環境を十分活用し、勉学に励んでください。」と告辞があり、続いて、佐藤啓二学長から「今後の医療を見据えた時、専門的な知識、経験を持った看護師の必要性が高まっていると考えています。日本の医療を支え、ひ



いては日本の国を支えるということを念頭に置き、7か月間しっかりと学んでください。」との式辞がありました。

最後に課程の教員紹介があり、午前10時40分ごろ式は終了しました。

## 寄附講座の設置

平成28年10月1日、本学医学部に「先端レーザー医学寄附講座」を新たに設置しました。  
概要は次のとおりです。

### 先端レーザー医学寄附講座

#### 1 設置目的

近年、光干渉断層法（OCT）が眼科を中心に臨床応用されるようになってきているが、光源として先端レーザー技術を使うことにより、形態観察だけでなく、物性解析や組織反応の時間解析までもが可能となる。この技術を駆使することにより、例えば、光バイオプシーが可能となり腫瘍外科においては、その切除範囲の設定を正確に把握することを実現される。

先端レーザー技術は、ポストゲノム技術であるとの期待もある。軟エックス線レーザーによるラフト構造の可視化がその一つである。本研究の発展は、病態解明のみならず創薬においてパラダイムシフトをもたらすものである。

究極の先端レーザー技術の医学応用は、基礎から臨床医学の発展に大きく貢献するものであり、そのレーザー理論と実践を行うことを目的とする。

#### 2 設置期間

平成28年10月1日から平成31年9月30日まで（3年間）

#### 3 設置場所

多摩ファイブプラザビル2階（東京都多摩市乞田1154-1）

#### 4 寄附講座職員の構成

教授 黒田寛人

東京大学工学部工業化学科卒業、博士（工学）

前職：埼玉医科大学医学部眼科寄附講座

先端レーザー医学センター・教授

准教授 鈴木将之

近畿大学理工学部電気工学科卒業、博士（工学）

前職：埼玉医科大学医学部眼科寄附講座

先端レーザー医学センター・准教授

#### 5 寄附者名

・株式会社アドバンスドレーザーテクノロジー

#### 6 寄附金額等

寄附総額3,000万円

## 平成28年度医学部解剖慰霊祭挙行

平成28年10月28日（金）覚王山日泰寺において、平成28年度の医学部解剖慰霊祭が本学から医学部長及び解剖学講座並びに病理学講座を始めとする関係教職員約30名、それに医学部の2学年次生127名が参列する中、320名余りのご遺族をお迎えして厳かに執り行われました。

今年度の慰霊祭では、平成27年10月からの1年間に系統解剖と病理解剖にご遺体を供せられた70柱の御霊を新たに合祀し、総数4,932柱の御霊に対し法要が営まれました。

午後2時、導師の入堂により祭儀が始まり、岡田尚志郎医学部長と北村直哉不老会理事長の慰霊の辞、続いて、学生代表として3学年次生の山田崇義さんが「日々変わりゆく医学の歴史の上には、明日を変えようと励む医療者の絶え間ない努力とより良い未来のために自らを託した無数の尊い人びとの献身が積み重なって形作られていることを感じています。医師を志すということは、未来を託す故人の想いを担い、今を生きる人のために真摯に命と向き合う使命を背負うことだと自覚させて頂くとともに、この解剖実習を通して、命と関わる仕事に就く者としての心構えまでもご教授頂いたように思います。故人のご意志のもと、ご献体にご理解を賜りましたご遺族の方々、不老会の皆さま方に対し、深く感謝申し上げますとともに改めて、ご献体くださった御霊のご冥福をお祈り申し上げ、お礼の言葉とさせていただきます。」と礼辞を述べ、御霊に深い感謝と尊崇の念を捧げました。

この後、広い本堂に僧侶の読経が響きわたる中、岡田



黙とうを捧げる学生たち

医学部長、解剖学講座を代表して中野隆教授、病理学講座を代表して池田洋教授がそれぞれ焼香し、続いて学生代表として3学年次生の小出里沙さんが、その後、参列者一人ひとりが焼香して献体者のご冥福を祈りました。

午後3時、岡田医学部長の参列者に対する謝辞をもってつつがなく慰霊祭が終了し、参列者は、学生が見送る中を帰路につきました。

## 国際基準に基づく分野別評価受審に係る説明会開催

本学は、2019年度に日本医学教育評価機構（Japan Accreditation Council for Medical Education：JACME）による医学教育分野別評価を受審することになっています。この評価は、世界医学教育連盟（World Federation for Medical Education：WFME）グローバルスタンダードに基づいて実施され、医学教育のグローバル化と標準化を目的に行われます。JACMEによる医学教育の分野別評価は、日本の全ての大学医学部が2023年までに受審する予定です。

これは、米国のECFMGが2023年以降、分野別認証を受けていない大学の卒業生にはECFMGの受験資格を与えないと宣言したことに端を発しています。このことは6年前の平成22年には既に公になっていましたが、本学では教員の認識がほとんどなく、今後実施すべき医学教育分野別評価受審に向けて、全学一致しての医学教育改

革を進めるためには高い壁があることが予想されました。

このため、医学教育分野別認証の意義とこれからの医学教育改革の必要性についての全学的な共通理解のため、全教員に参加を呼びかけ、平成28年8月25日（木）、26日（金）の2日間にわたり、たちばなホールにおいて医学教育分野別認証に関する説明会を開催しました。

説明会には、三宅養三理事長を始め、佐藤啓二学長、岡田尚志郎医学部長、今井裕一医学教育センター長からそれぞれ講演があり、2019年度を受審に向けてのスタートが切られたことになりました。多くの教員が今後の医学教育改革の必要性を理解し、課題の多いカリキュラム改革の難題に前向きに取り組まれることが期待されます。

## 平成28年度第1回大学院医学研究科FD特別講義開催

平成28年9月20日（火）大学本館202講義室において、大学院医学研究科FD（ファカルティ・ディベロップメント）特別講義が開催されました。今までは、医学部と合同で開催されていましたが、今回からは医学研究科単独での開催となりました。

今回は、生物学・武内恒成教授がホストとなり、講師として山梨大学医学部薬理学講座の小泉修一教授をお招きしました。小泉教授には「グリア細胞が脳の生理機能に与える影響とその分子メカニズム」及び「山梨大学におけるリエゾンアカデミーと養成プログラム」をテーマ

として、2部構成で講演して頂きました。

第1部では、小泉教授の神経グリア細胞についての最先端でのご研究について、第2部では、山梨大学で実施しているリエゾンアカデミー研究医養成プロジェクトなど学部大学院融合事業の現状について紹介されました。

当日は、大学院医学研究科の多くの担当教員が参加し、今後の研究・教育の質の向上につながるものとなりました。医学研究科では、引き続きFDの講義を開催し、更なる授業内容・方法を改善し、向上させて参ります。

## 平成28年度第2回医学部FDセミナー開催

平成28年10月6日（木）医学部講義室において、東京慈恵会医科大学教育センター・教授の福島統先生をお招きして、第2回医学部FDが開催されました。

福島先生には、本年9月1日（木）にも来学頂き、「スクールミッションを具体化するカリキュラムー医学は1科目」と題して、ユニット型の統合カリキュラムに関するご講演を頂きました。医学部では、来年度の新入学生に対して新カリキュラムを導入することを検討しており、参加した教員は、ユニット単位で基礎から臨床までを有機的に統合して講義・実習するカリキュラムについて学習しました。

今回のFDでは、その理解を基に、学修成果基盤型教育（Outcome-based Education: OBE）を基盤にしたコンピテンシーを達成するための医学部のカリキュラム改革の在り方を模索するグループワークを行いました。学修成果基盤型教育の概念についての講演を通して、コンピテンシーを設定すること、そのコンピテンシーを修

得するためにどのようなカリキュラムを構築すべきなのかを解説頂きました。

また、講演で最も重要であると強調されたのは、本学がどのような医師を育成したいのか、その教育理念の明確化ということでした。

現在、医学部ではAP（アドミッション・ポリシー）、CP（カリキュラム・ポリシー）、DP（ディプロマ・ポリシー）の見直しが進んでおり、本学がどのような卒業生を社会に送り出していくのか議論を重ねています。これと並行して、本学が理想とする卒業生を育成するためのカリキュラム改革を参加者全員で検討する内容となりました。

FDを重ねるにつれ、全学的に卒前教育への熱意が高まっているように思われます。医学部では、この機運を逃さず、卒前教育のレベルアップを全教員で図って参ります。

## 秋の交通安全講習会開催

平成28年10月24日（月）午後5時30分から大学本館304講義室において、医学部・看護学部の学生を対象とし、名東警察署交通課長の橋本博史警部を講師に迎え、交通安全講習会を実施し、50名余りの学生の参加がありました。【写真】

講師からは、愛知県は13年連続して交通死亡事故ワースト1であり、お年寄りの死亡事故が多いことなどの講和がありました。また、「その心理状態が事故を招く!?～ドライバーの心に潜む法令違反・悪質危険運転の原因～」と題したDVDを鑑賞しました。このDVDは、運転者のどんな心理状況が交通事故に繋がるかという面から作成されたもので、誰もが抱くちょっとした思いが交通事故を起こす可能性があることを教えてくれました。

年2回、春と秋に実施している交通安全講習会を通じ、学生一人ひとりが交通安全に努めてくれることを期待します。



## がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン 市民公開講座開催

平成28年10月27日（木）午後6時から大学本館201講義室において、がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン市民公開講座が開催されました。

これは、本学が名古屋大学等東海地区の医療系学部を擁する6大学と連携して参加している「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」の事業の一環として開催されたものです。

当日は、がんプロフェッショナル養成プログラム教育委員会委員長である臨床腫瘍センターの三嶋秀行教授を

座長に、同センターの岩本慈能講師、臨床研究支援センターの室谷健太講師、内科学講座（呼吸器・アレルギー内科）の久保昭仁教授（特任）、薬剤部の築山郁人室長の4名が講師として、がんの予防、治療及び緩和ケアに関する内容の講演を行いました。

この公開講座には、近隣市民約50の方々にご出席頂きました。参加された方々の関心が高い「がん医療」に関する内容であるだけに、講師の一言ひとことにながずながら熱心に聴講されていました。

## 平成28年度医大祭“be unique～医かしたやつら～”

平成28年度の医大祭のテーマは「be unique～医かしたやつら～」です。医大祭も今回で43回を数え、カリキュラムや実習スケジュールが大きく変化している中で、医大祭実行委員は医大祭の伝統を全力で受け継ぎ、盛り上げていきたいとがんばっています。

平成28年10月29日（土）と10月30日（日）に行われる主なイベントは次のとおりです。

### 【主なイベント紹介】

#### ☆2日間開催イベント

- ・模擬病院
- ・模擬店
- ・看護イベント
- ・病院イベント
- ・学生イベント

#### 10月29日（土）のイベント

- ・献血・骨髄バンク登録

#### 10月30日（日）のイベント

- ・林家三平落語会
- ・リサイクルマーケット



## 医学部学外体験実習体験記

近隣の老人保健施設や病院等にご協力頂き、医学部学生が学外体験実習を行いました。本院以外での実習は、学生にとって貴重な体験となったようです。実習を終えた学生の感想文をご覧ください。

### 自分に足りないことを学んだ実習を終えて

実習施設：老人保健施設愛泉館  
3学年次生 小出 里沙

今回の実習で、私は老人保健施設愛泉館に行かせて頂きました。老人保健施設での実習は、今まで行ってきた実習とは少し違っていて、患者さんを診ることはなく、病気を抱えている方や、自分で生活していくことが困難な方の日常生活を見させて頂きました。そのため、医師や医学生としての目線ではなく、一人の人としての目線で現場を見ることができました。学年が上がるにつれて専門的なことが増えていき、どうしても医学生の目線で見てしまうことが多いですが、純粋な目線で実習できる機会があったのは、貴重な体験でした。

私たちが実習した愛泉館は、毎日イベントがとても豊富で、色々な方のニーズに応じていらっしゃいました。その中で私が印象的だったイベントは、年配の方に馴染みのある布草履づくりです。昔の方々は藁草履を編んでいたそうですが、時代に合わせて布草履にしているそうです。布草履は、90分あれば一足作ることができてしまうので、イベントに参加していらっしゃる方が多くいました。私は、ある一人の方が作られているのを補助していました。その方は右半身が動かず、利き手ではない左手で一生懸命作っていらっしゃり、私が手伝えることはほとんどありませんでした。集中して作っていらっしゃったので、60分位で布草履を完成させました。ボランティアさんが、「これで完成ですよ。」と伝えると、その方は感激して涙を流していらっしゃいました。自分の利き手ではない手を使い、60分休むことなく完成させた物を見て、感激して涙するという事は、きっと色々な感情があったのだと思います。私はその時初めて、その方の過去や背景について考えました。当たり前のことですが、それぞれの方に色々な過去があり、それを心に秘めて生きていらっしゃいます。コミュニケーションをとる上で、「相手の方について考える」ということを意識しなければならぬと思いました。私は、単純なことですが、もしかしたら人と向き合う上で最も重要であろうことに気づくことができました。

実習を終え、今までは勉強している時も、医学的なことばかりに目を向けてきましたが、医学的な部分ではないところにも大切なことがあることが分かりました。

今回の実習で出会ったある方は、「治っていなかったとしても、お医者さんに良くなっていますよと言われると本当に治ったような気になりとても楽になる。だから

そう言ってもらいたい。」とおっしゃっていました。医師としての技術や知識も大切であるけれど、患者さんの気持ちに寄り添い、適切で正しい会話をすることも大切であると教えて頂きました。

医学を勉強していると患者さんを含めた相手の気持ちを考えるということ学ぶ機会はありません。今回の実習は、まさに良い機会でした。まだまだ人としても未熟で、コミュニケーションが上手くとれないこともあります。今回の実習で医師の仕事をする上で大切なことに気づくことができました。

有意義な実習をさせてくださった愛泉館の皆さまに感謝しています。



# コンケン大学医学部短期留学体験記

本学では、コンケン大学（KKU）医学部と平成23年度に学術国際交流協定を締結して以降、教育と研究における国際交流の促進を目指し、積極的に学生等の交流を行っており、プログラムの一環として、臨床実習選択（elective）コースへ本学医学部学生を派遣しています。

平成28年度は、平成28年7月30日（土）から8月14日（日）まで4名の学生が留学プログラムに参加しました。この留学を終えた学生から寄せられた体験記をご紹介します。

## 「KKU臨床実習選択コース」への派遣者

医学部5学年次生 明石 憲佳

私は2週間コンケン大学の産婦人科で実習させていただきました。愛知医科大学では5年生で1週間産婦人科を実習するのに対し、コンケン大学では4年生で12週間実習をします。今回は4年生のグループと一緒にまわりました。驚いたことは、毎日学生だけで先生が来る前に朝と夕方回診をすることや週に1回程度夜勤をこなすことです。それに対し、コンケン大学の学生は「heavy work but happy to do」と言っており、意識の高さを感じました。コンケンの学生は大変優しく知識も豊富で何でも英語で説明してくれるなど英語力が高かったです。教科書が英語であることに加え、授業の一環で毎週英語ディスカッションを行う授業もあることが素晴らしいと感じました。

今回の研修では、病気のことを英語でより深く学べたことだけでなく、学生と触れ合うことでそれ以上のことを感じる事ができて、短い期間でしたが本当に行ってきたと感じました。



明石さん（右から3人目）

医学部5学年次生 岩田 侑実

期待と不安でいっぱいだったコンケン大学への留学は、自分にとって最高の経験となりました。タイでの生活は日本とはかなり異なったものでしたが、コンケン大学の学生は私たちに本当に良くしてくれました。英語力も医学の知識も、現地の学生のレベルは本当に高く、一医療者として役割を任されている彼らの姿にとっても刺激を受けました。また、彼らと関わることで、今までとはまた違った視点から母国の医療について考えるきっかけにもなりました。

この経験を自分の糧とし、今後も課題に挑戦し、努力する姿勢を大切にしていきたいです。



岩田さん（前列中央）

### 医学部5学年次生 加藤 礼子

私が参加していた糖尿病内分泌内科では、外来見学や病棟回診をしながら、レジデントや教授と英語で頻りにコミュニケーションを取りました。タイでは、糖尿病の急速な増加やバセドウ病の多さなどが特徴的とのこと。また、タイの学生やレジデントは英語力に優れ、日常会話はもちろん、医療単語は当たり前のように全て暗記していることに感心しました。以前私は台湾の医学生と話す機会がありましたが、皆とても英語力に優れていたため、日本も医療英語や英会話に力を入れるべきだと改めて実感しました。現地では、学生やレジデントが毎日のように食事に招待してくれたりして、留学生に対しての暖かい気遣いに毎日感謝でした。

今回の留学は、本当に他文化を学ぶ上で大変良い経験で、また是非機会があれば参加したいです。



加藤さん（右から2人目）

### 医学部5学年次生 服部 由季

今回コンケン大学の耳鼻科で2週間実習させて頂き、回診・外来・オペなど研修医の方から指導を受けました。タイにはタイ語の医学書が無く、医学を英語で学びます。そのため研修医の英語力はとても高く、週に1度のAcademic dayには、研修医が英語で授業をし、聞き手は英語論文にアクセスしながらレベルの高い議論を繰り返していました。

最終日は工場へ行き、労働者の検診を見ました。ここではポリクリ実習生が、鼓膜所見や聴力・眼底検査などを行い、各科の専門業務を実習の一環としてこなしていました。医師不足が問題であるタイですが、一人で全身を的確に見ることのできる総合医が着々と育っていると感じました。

実習後は、夕食やムエタイ体験など毎晩のように連れ出して頂き、「微笑みの国タイ」と呼ばれる由縁であるタイ人の温かい気質を身を持って感じました。私にとってコンケン留学は、人生の糧となるような貴重な経験となりました。



服部さん（左）

## 看護学部一日体験入学開催

平成28年10月29日（土）看護学部実習室において、看護学部一日体験入学が開催されました。【写真】

これは高校生を対象とし、看護学部における講義を体験することで、大学で看護学を学ぶことへの関心を深めて頂くことを目的として開催されています。

当日は、50名の高校生が参加し、午前中の体験授業（テーマ「生活の中で考えるセルフマネジメント」）では、緊張する中で皆真剣に聞き入っていました。

体験演習（テーマ「食事バランスと手ばかり法」）では、自身の食生活を実際に振り返りながら、たくさんのフードモデルを使って手ばかり法を体験しました。バランスの良い食事や食べる順序、食事時の水分の取り方などを学習し、自身の健康について深く考える機会となりました。

昼食は、アシスタントを務めた看護学部生と歓談しながら交流を深め、午後からはドクターヘリ、ドクターカーを見学しました。



参加した高校生からは、「愛知医科大学看護学部の魅力が十分伝わった。」、「進路を考える良い参考になった。」、「食生活を見直すきっかけとなった。」、「在学生と話しができてとても良かった。」などの感想が寄せられ、参加した高校生にとっては、貴重な体験を通してとても有意義で充実した一日となりました。

## 特定共同指導結果報告

保険医療機関における保険診療等について定められている「保険医療機関及び保険医療費担当規則」等を更に理解し、保険診療の質的向上及び適正化を図ることを目的として、平成28年6月16日（木）及び17日（金）に厚生労働省並びに東海北陸厚生局及び愛知県による社会保険医療担当者の特定共同指導が実施され、平成28年8月19日付けにて厚生労働省保険局医療課長からの結果通知及び指摘事項を受理しました。指導結果には「概ね妥当」、

「経過観察」、「再指導」、「再監査」があり、本院は「経過観察」でした。

また、指摘事項については、診療に係る事項、薬剤部門に係る事項、看護・食事に係る事項、請求事務に係る事項、包括評価に係る事項の各項目別に「改善報告書」を作成し、平成28年9月26日（月）に東海北陸厚生局へ提出しました。

## 病理診断科の設置

平成28年10月1日付けで「病理診断科」が設置されました。本院では、これまで診療の支援系部門として「病院病理部」が置かれ、患者さんの病変から得られた組織もしくは臓器から病気の診断及び今後の治療方針を決定する情報の提供を行ってきたところです。

昨今の医療環境においては、求められる診断の質はよ

り高度化し、病理診断における医師の積極的関与と責任の明確化が求められています。更には大学病院にふさわしい水準の病理診断を率先して実施するという面からも、診療・研究・教育を担うその社会的責務の大きさを自覚して、質の高い医療の提供を支えて参ります。

## 私立医科大学病院感染対策協議会総会開催

平成28年8月6日（土）本学本館たちばなホールにおいて、第8回私立医科大学病院感染対策協議会総会が開催されました。【写真】

本協議会は、私立医科大学附属病院における病院感染対策を強化することで良質かつ安全な医療を提供し、社会に貢献することを目的としているもので、総会には全国80施設から合計362名の参加者がありました。

「サイエンスに立脚した実践的な感染制御を目指して」をテーマとした総会は、羽生田正行病院長の開会あいさつに始まり、文部科学省の御講演、協議会報告及び医師・薬剤師・看護師・臨床検査技師の各専門職部会報告が行われた後、「アウトブレイク事例から学ぶ感染制御」をテーマとする当番校主催のシンポジウムが開催され、5



題の講演について有用な討論がなされました。

本協議会開催に当たり、ご協力を賜りました関係者の方々に心から御礼申し上げます。

## 平成28年度第2回保険診療に関する講習会開催

臨床研修病院においては、全職員を対象とした保険診療に関する講習が、年2回以上実施されていることが必須とされており、平成28年度第2回保険診療に関する講習会が、平成28年9月15日（木）午後5時30分から本館たちばなホールにおいて開催されました。

講習会のテーマは、「特定共同指導の結果について」と題し、本年6月16日及び17日に実施されました特定共同指導の結果及び指摘事項の確認について、株式会社ソ

ラストの坂井田見氏から説明頂きました。指摘事項として診療に係る事項、薬剤部門に係る事項、看護・食事に係る事項、請求事務に係る事項、包括評価に係る事項に分け、それぞれにおいて資料を基に解説と今後の対策についてもお話頂きました。

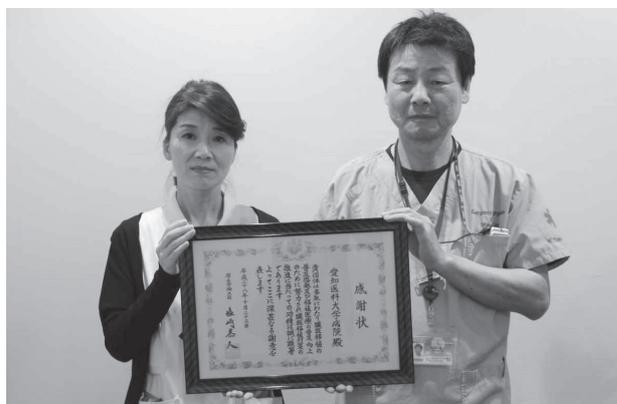
講演会には、医師、コメディカル及び事務職員など幅広い職種から208名の参加があり、職員の関心の高さを窺い知ることができました。

## 移植医療対策推進功労者に対する 厚生労働大臣感謝状受賞

平成28年10月23日（日）静岡県静岡市で開催された臓器移植推進国民大会において、移植医療対策推進功労者に対する厚生労働大臣感謝状贈呈があり、団体として愛知医科大学病院が受賞いたしました。

これは、移植医療対策の推進に顕著な功績のあった団体に対して、厚生労働大臣がその功績を称え贈呈されるものであり、本院での長年にわたる臓器移植の普及啓発や移植医療の普及・向上に寄与したことが高く評価されました。

贈呈式に出席した本院臓器提供実務委員会・委員長の武山直志教授（救命救急科）は「今回の受賞を機に、本院での臓器提供・移植を一層推進させていきたいと思えます。」、院内移植コーディネーターの石橋ひろ子師長は「本院の役割として、求められているということを改めて感じました。移植医療の推進に努めていきたいと思えます。」と感想がありました。



石橋師長（左）と武山教授（右）

## 夏休みわくわく病院体験・探検イベント開催

平成28年8月21日（日）本学職員及び医学部同窓会員のお子さん（小学校高学年）を対象に「夏休みわくわく病院体験・探検」イベントが開催されました。【写真】

これは、医療手技体験等を通して、医療への関心を持って頂くとともに、親の職場を見てもらうことを目的としています。

参加した子どもたちは、ドクターヘリ見学を始め、心臓エコー検査体験や内視鏡手術用トレーニングボックスを使ったビーズの把持や移動操作、白衣を着用し聴診器体験及び記念撮影とCT・透視による野菜や果物の画像確認等の盛りだくさんのコースを体験しました。

当日は残暑の厳しい中、36家族96名の方に参加頂き、楽しいひと時を過ごすことができました。参加者からは、「初めての体験で貴重だった。」「クイズもあり面白かった。」「夏休みの自由研究に使える。」「ドクターヘリをもっと見ていたかった。」などのご意見・ご感想が寄せられました。

本院では、今後も様々なイベントを企画していく予定です。



## 東海テレビ主催「こどもまつり2016」へブース出展

平成28年9月10日（土）・11日（日）の2日間にわたり、吹上ホールにおいて東海テレビ主催「こどもまつり2016」が開催され、本院も体験コーナー「認定王国」にブースを出展しました。子どもが主役のこのイベントに、多くの来場者が訪れて、歌やダンスのコンテストや体験コーナーを始め、ゆるキャラコーナーなど子どもが楽しめるイベント満載で賑やかに行われました。

本院の出展ブースでは、「ディスプレイの手術着を着て内視鏡手術の模擬体験」と「白衣を着て聴診器で自分の心音を聞く体験・記念撮影」の二つのイベントを開催しました。【写真】両日とも大変盛況で、2日間で延べ1,140名のお子さんに体験頂きました。また、本院からは、医師、看護師を始め、18名がスタッフとして参加し、ブースを盛り上げました。当日の様子は、東海テレビ「こどもスイッチ！」等の番組でも紹介されました。



## 耳鼻咽喉科学講座主催 解剖学・耳鼻咽喉科学手術手技セミナー開催

平成28年8月20日（土）から27日（土）の期間にわたり、耳鼻咽喉科学講座主催で手術手技セミナーが開催されましたので、ご紹介いたします。

本セミナーは、8月20日（土）、21日（日）は鼻科学、22日（月）23日（火）は頭頸部外科学、26日（金）27日（土）は耳科学と、それぞれの専門分野ごとに指導医が専修医や専門医取得前後の耳鼻咽喉科医師に対して、手術における重要な解剖学的知識を講義し、実技実習を行いました。

耳鼻咽喉科の手術は直接触知することのできない副鼻腔や中耳・内耳を取り扱い、そこに様々な神経や血管が集中しています。正確な解剖学的知識に加え、内視鏡や顕微鏡での手術手技を習得する必要があります。実際の臨床では直接見ることのない危険部位の確認や顕微鏡や内視鏡を持ち込んでの新しい手術手技の施行など、この機会でないとは得ることができない大変貴重な経験をさせて頂きました。

これまでは耳鼻咽喉科領域の手術手技セミナーは少数の国内施設、もしくは海外の解剖実習に申し込み、高額な参加費を払って選ばれた者だけが参加できるものでしたが、今回解剖学講座のご協力により、全ての耳鼻咽喉科医局員が参加し、勉強させて頂くことができました。改めまして今回の実習をご提案・ご協力頂いた解剖学講座の中野隆教授、内藤宗和教授を始め、解剖学講座の皆様へ深く感謝申し上げます。

文責：医学部耳鼻咽喉科学講座



内視鏡下鼻手術を指導する内藤教授



植田教授による耳手術のデモンストレーション

## 病院公開講座&病院食の試食会開催

平成28年9月10日（土）中央棟2階において、近隣住民の方々を対象に、本院栄養部主催による病院公開講座及び病院食の試食会が開催されました。【写真】

栄養部では、平成28年9月から患者さんの意見を病院食に取り入れることを目的として、毎日夕食時に調理師が病棟を訪れて、患者さんから直接お話を聞く取り組みを始めています。今回の企画は、この取り組みのPRと調理師のユニホームを一新したお披露目を兼ねています。

公開講座では、栄養部の管理栄養士が「健康的な生活を送るための毎日の食事について」というテーマで講演を行い、合計68名の方が参加されました。また、その後行われた病院食の試食会には46名が参加され、当日の夕食に提供する「メカジキのトマトソース仕立て」を試食して頂き、「塩分量が少ないのにしっかりとした味が付いて大変美味しい。」という感想を頂きました。その他、栄養相談には8組の方が参加され、多くの質問が寄せられるなど、健康食に対する関心の高さが窺われました。

今回栄養部として初の試みでしたが、参加者アンケートで「良かった。」との回答が多く寄せられ、楽しく過ごして頂くことができました。



栄養部では、今後とも、患者さんの意見を大切にしながらスタッフ一丸となって病院食の提供に努めて参ります。

## 平成28年度中部ブロック南海トラフ地震 防災対策推進連絡会広域防災訓練へ参加

平成28年8月28日（日）中部地方整備局が中心となって、平成28年度中部ブロック南海トラフ地震防災対策推進連絡会広域防災訓練が開催されました。【写真】

この訓練は南海トラフ巨大地震を想定し、内閣府・東海四県三防災市などが参加して各機関の連携体制の検証と広域連携体制の強化を目的として実施されました。

今回は最大規模の地震が発生したと仮定して、DMAT（災害派遣医療チーム）の活動訓練も行われ、本学からはDMATが1チーム（医師1名・看護師1名・業務調整員3名）参加し、自衛隊のC-130輸送機で航空自衛隊小牧基地から富士山静岡空港まで移動して、自衛隊との協働・空路での被災地への移動について検証を行いました。その後、静岡県牧之原市まで陸路で移動し、同市の災害対策のあり方について意見交換を行いました。

大規模災害時に迅速にDMATが被災地に赴くことは重要なことであり、その手段の一つとして自衛隊との共同作戦は不可欠と考えられています。災害時に一人でも多くの命を救うためにDMATは日常から訓練を重ねていますので、皆さまのご理解とご支援をよろしくお願い申し上げます。



## 医療安全管理室

### 初期臨床研修医のための医療安全に関する講義実施

平成28年9月12日（月）、28日（水）の2日間にわたり、卒後臨床研修センターにおいて、医療安全管理室による初期臨床研修医のための医療安全に関する講義が行われました。

これは、医師としてのキャリア形成初期に質の高い安全な医療を身に着けることを目的としており、初期臨床研修医に多く認められる代表的なインシデントについての原因や対処、改善方法について解説されました。

講義では、総論として「卒後臨床研修センターを含む病院の医療安全に関する現状」について、各論として「ドレーンの管理」、「患者確認のあり方」、「麻薬管理の徹底」に関するレクチャーがそれぞれ行われ、合計30人の研修医が出席し、病院の基本方針である「安全で良質な医療の実践」について学びました。

臨床研修病院の指定基準として、医療安全のための体制整備が必須であること、研修医の成長において医療安



本院の医療安全体制を解説する高木副室長

全文化を根づかせることは不可欠とされています。医療安全管理室では、これからも継続して医療安全に関する教育を行っていく予定です。

## Basic Disaster Life Support (BDLS) コース開催

平成28年9月25日(日) 大学本館たちばなホールにおいて、災害医療研究センター主催(後援:愛知県医師会)で、アメリカにおける標準化災害医療教育プログラムであるBasic Disaster Life Support (BDLS) コースが開催されました。【写真】

BDLSは、米国救急医学会が災害医療に関与する全ての職種が受講することを推奨しており、これまでに全世界で15万人を越える修了者を輩出しています。

今回、本学の職員を含む総勢144名が受講し認定証を手に入れました。本コースを受講することによって、自然災害やテロ事件に対応するための最低限の知識を体系的に吸収することができ、想定される南海トラフ巨大地震や潜在的リスクのある種々のテロリズムに向けての学習を深めることができました。

災害医療研究センターでは、来年度もBDLS及び更に



高度なコースであるAdvanced Disaster Life Support (ADLS) の開催を予定しておりますので、皆さまのご受講をお待ちしております。

## アンガーマネジメントを用いたクレーム対応研修開催

法人本部では、SD(スタッフディベロップメント)の取り組みとして、教職員を対象にコミュニケーション能力向上を目指した研修を開催しています。

平成28年度は、「アンガーマネジメントを用いたクレーム対応」をテーマに開催し、教職員を始め、本院に勤務している株式会社ニチイ学館、株式会社ソラストの職員も参加し、合計414名が受講しました。【写真】

本研修は、平成28年7月に1回目を開催し、講義とグループワークを通して、アンガーマネジメントの知識、テクニックを学び、職場で中間課題に取り組んだ後、8月に2回目の講義を行い、課題をふり振り返りながら、学びを深めました。

受講者からは「怒りの感情は自分の勝手な期待が裏切られた時に起こる。怒りをコントロールする方法も参考になった。」(教育職員)、「怒りの本質を見極めて、相手が本当に伝えたいことは何かを聴きだすことが大切だと分かった。」(看護職員)、「スケールテクニックを使うことで、怒りが和らぐことが実感でき大変良かった。」(医療職員)、「相手の怒りに対して反射で対応せず、6秒待ってみることを実践しようと思う。」(事務職員)などの



感想が寄せられました。

法人本部は、教職員のコミュニケーション能力は、大学の運営に欠かすことのできない重要な能力と位置づけ、引き続き学園全体で能力向上に取り組んでいく予定です。

### 日程

第1回：平成28年7月15日、21日、26日

第2回：平成28年8月22日、26日、30日

※各日90分の講義を3回行い、計9セッションを実施

## 新規採用事務職員向け半年フォロー研修実施

事務部門では、SD（スタッフディベロップメント）の取り組みの一環として、新規採用職員を対象に配属後半年を一つの区切りとしたフォロー研修を実施しています。昨年に引き続き、平成28年9月6日（火）愛知県労働協会において、「新入社員ステップアップセミナー」に対象職員4名全員が参加し、他企業の新入社員とともに研修を受講しました。【写真】

また、平成28年9月16日（金）中央棟3階カンファレンスルームにおいて、学内でのフォロー研修を実施し、研修受講報告書を作成・報告し合い、学びと気づきの共有を行いました。また、四月からの半年間を「モチベーション曲線」を用いて振り返り、どんなできごとがあると自分のモチベーションが変化するかを各々が内省し共有しました。

本学では、大学の将来を担う職員を育成するため、今後も継続的にSDに取り組んでいく予定です。



## 管理職勉強会開催

平成28年4月1日に女性活躍推進法が施行されたことを受け、本学では「一般事業主行動計画」を策定しています。積極的な女性の継続就業支援、女性のキャリア支援に取り組むためにも、職場における管理職の意識改革が必要であることから、平成28年10月28日（金）大学本館203講義室において、愛知県女性活躍促進コーディネーターの荒木美弥子先生を講師にお招きし、「女性活躍を進めるための職場づくり」をテーマに、管理職勉強会を実施しました。【写真】

女性活躍推進法が施行された背景にある、日本の人口構造の変化や管理職の女性比率の国際比較など、マクロ視点の講義を踏まえ、女性活躍推進の基盤となる三つの段階と課題（採用・定着・登用）の解説に加え、管理職に求められる承認スキルについて学びました。

出席者からは「女性活躍を進めるための職場づくりは



とても重要だと感じた。」、「管理職への昇進を望まない理由が印象に残った。」、「管理職のベースを学ぶ時期に育児が重なることを理解して、女性部下の育成に取り組む必要がある。」等の感想がありました。



監査室

## 平成28年度ハラスメント防止講演会開催 ～大学・病院におけるハラスメントの実例から学ぶ～

ハラスメントの防止に係る啓発活動の一環として、平成28年8月10日（水）午後5時30分から大学本館201講義室において、公益財団法人21世紀職業財団の岩月律子氏を講師にお迎えし、ハラスメント防止講演会が開催され、28名の参加がありました。【写真】

今年度の講演会については、例年の基礎学習（テキスト・DVD視聴）から趣向を変え、より具体的な事例を紹介し学習することで、職場の状況に照らし合わせながら、ハラスメントを正しく理解して頂き、ハラスメントのない明るい職場環境を作る為の参考になることを目的として開催されました。

当日は、講演に先立ち、ハラスメント防止委員会委員長の岡田尚志郎医学部長からハラスメント防止の重要性についてあいさつがありました。講演では、実例に伴うケーススタディにおいて、異なる職種同士がディスカッションして答えを考えるグループワークが行われました。従来の聴講型の講演会ではなく、実際に各人がそれ



ぞれの立場で考え、意見交換することにより、充実したグループワークが行われ、理解が深まったと思われます。

講演後のアンケートにおいても、講演会の評価について80%以上が「大変良かった」、「良かった」を選択しており、「参加型が良かった」、「もっと参加者を増やすべき」などの意見があり、監査室では参加者増員に向けての対策を検討していきたいと思えます。



# 第9回アジア太平洋眼形成再建外科学会 第4回日本眼形成再建外科学会・合同学術集会を終えて

本院眼形成・眼窩・涙道外科の柿崎裕彦教授（特任）が大会長として、第9回アジア太平洋眼形成再建外科学会、第4回日本眼形成再建外科学会の合同学術集会が開催されました。柿崎教授（特任）は、両学会の理事長に就任されており、学会開催に当たり、ごあいさつを頂きましたので紹介いたします。

去る8月26日（金）、27日（土）大阪国際交流センターにおいて、表題の学会を開催させて頂きました。アジア太平洋地域に止まらず、イギリス、オランダ、スイス、アメリカ、トルコ、プエルトリコ、イスラエルなど、世界各地域から合計282名の参加を得ました。これもひとえに皆さまのご支援の賜物と思っております。

今回の合同学術集会は、世界標準とされる眼形成の知識や技術を知ってもらうことを第一の目的としました。世界の中でも、特に実力のある先生方にご講演頂いたので、この目的は十分に達成できたと思います。

第二の目的は、若手医師に世界との横のつながりを持ってもらうことでした。日頃、論文でしか名前を見たことのない先生方と直に話をする事によって、眼形成をより身近に感じてもらえたのではないかと思います。若い先生の中には、留学や手術の見学について熱心に質問されている方もおられました。海外の眼形成の先生方は皆、気さくで良い方ばかりです。日本の眼形成が外に向かって発展していくことを願っています。

第三の目的は、日本の底力を世界に向かって発信することでした。Keynote Speakerとしてご講演頂いた3名の先生方の講演内容は、世界最高水準の内容であっただけに、参加者は皆、感嘆のため息を漏らしていました。その他にも、国内からの講演者や座長の先生方も実力者揃いで、大いに日本の底力を見せつけることができたと思います。

本学術集会では、眼形成と学際領域にある、形成外科、皮膚科、耳鼻科、脳神経外科の著名な先生方にもご講演を頂き、「全体の中の個、個から見た全体」を感じて頂いたものと思います。また、眼形成とは切っても切り離せない美容外科に関しても、韓国美容外科学会の理事長をKeynote Speakerとしてお迎えし、また、10名を超える実力派美容外科医の方々にご講演頂いたため、この不可分の関係にある両分野の概要を理解して頂いたものと思います。

今回は、我が国で初めて行われた国際的な眼形成学会です。このような栄誉ある学会を開設間もない当科が主宰することができ、僥倖と感じます。これもひとえに、三宅養三理事長を始めとした本学理事会の英断の賜物です。ここに厚く御礼申し上げます。

当科、愛知医科大学病院 眼形成・眼窩・涙道外科は、本学の国際的な発展と歩調を合わせ、以上のように国際的な視点に立って活動しております。海外からの留学生を多数受け入れており、また、2017年からはフィリピンとインドネシアにおいて、医療ボランティア活動も行います。興味のある方は、学生、職員にかかわらず、当科までご連絡下さい。



この2年間、アジア太平洋眼形成再建外科学会の president として、会の土台作り、発展に奔走してきました。かなり困難を極める仕事でしたが、この重責を大過なく果たすことができ、胸を撫で下ろしております。今後は、新たに vice president に選出された高橋靖弘先生（眼形成・眼窩・涙道外科・准教授）が、アジア太平洋眼形成再建外科学会関連の仕事を引き継いでくれることになっております。

今後とも、皆さまのご指導、ご鞭撻のほど、宜しくお願い申し上げます。

（眼形成・眼窩・涙道外科 教授（特任） 柿崎裕彦）

## 第20回へき地・離島救急医療学会in島根において 医学部学生が学会発表

平成28年10月22日（土）島根県出雲市にある島根県立中央病院で開催された「第20回へき地・離島救急医療学会」において、本学医学部3学年次生の松川晃子さんと梶浦美佳さんが共同演者として学会に参加し、学会発表を行いました。【写真】

本学会は、へき地で起こっている医療問題の現状を把握、各地区で出された課題を検討し、お互いに解決に導くための議論を行うことを目的として発足し、学術集会は20回目を迎えました。各医療へき地での問題について議論し、それぞれの地域で行われている取り組みを参考に、全国各地のへき地医療を支えている医師・看護師・助産師などの医療人に希望とやりがいを与えるとともに、モチベーションの維持に貢献しています。

近年では、へき地での医師不足問題が取り上げられ、各大学で「地域枠学生」の育成に力を入れています。今回本学の学生が初めて「へき地医療の在り方について学ぶ－学生の立場から－」と題して発表を行うことから、学会でも注目を浴び、その内容に多くの賞賛を頂きました。この経験は、学生にとって大変貴重なものであり、へき地医療に対する考えや知識を更に深めることができました。

学生の参加に当たっては、本院救命救急科の青木瑠里講師が尽力され、昨年10月に沖縄県で開催された「第19回へき地・離島救急医療学会」において、本学医学部における地域枠学生に対する教育カリキュラムや地域医療への関心を高めるための研修の取り組みについて講演されたことがきっかけとなり、学会の事務局を通じて、学生らの発表が実現することとなりました。

また、当日の学生らの発表に対して、へき地支援機構の崎原永作先生、地域医療振興協会の杉田義弘先生、長崎大学の高山隼人先生から直接お声掛けを頂き、「全国の地域枠学生を孤立させず、今後の地域医療を担っていく人材の育成を支援していきたい。来年も学生の意見を教えてほしい。」という温かい応援メッセージを頂きました。

学生を引率・指導に当たった青木講師からは「今回、地域医療を学ぶ後輩たちがへき地を始めとする地域医療の現状を理解し、真正面から向き合い、堂々と自らの言葉で語りかける姿に励まされ、感動を覚えた医師は少なくありません。『経験という学びに勝るものはない』という思いで、今後も学生たちを支援し続けることが、卒業生であり、先輩医師である私の役割であると考えております。また、各大学から地域枠学生が卒業し、彼らがどのようにへき地・地域医療に携わっていくのかという現状や問題を国のレベルで検討される必要性を感じています。医学系の学会は多数ありますが、地域枠学生が参

加すべき学会の一つとして、今後も学会発表の機会を学生たちに与えていけるように支援していきたいと思えます。」と感想が寄せられました。また、学会に参加した松川さん、梶浦さんから「地域医療についての考えや知識を深めることができ、熱い思いを持った方々との意見交換を通して、とても刺激を受け自分も更に頑張ろうと思った。」「この経験は、今後の学生生活や医師としてのキャリアプランにも大きく関わると感じています。学会に参加して見えてきた問題点などを全国の学生とともに検討する必要もあると思います。」と感想を頂きました。



記念撮影  
青木講師(左) 松川さん(中央) 梶浦さん(右)

学生らは、各地域で活躍される方々との交流を通して、全国のへき地医療の現状を知り、学びの多い機会になりました。

学生らの参加に当たり、多大なるご理解ご協力を頂きました学会関係者の皆さんに感謝申し上げますとともに、本学医学部では地域医療を担う人材の育成にこれからも努めて参ります。

### 公開講座に伴い参考図書を展示

医学情報センター(図書館)では、本年9月に「学んで守ろう自分の身体」というテーマで開催された愛知医科大学公開講座に伴い、本センターのスタッフによる選書及び講師から推薦があった参考図書や視聴覚資料を13点展示しました。【写真】

センターエントランスで展示した図書・視聴覚資料は「認知症」、「災害時の感染管理」、「運動療法」、「災害医療」に関するもので、地域住民の方に分かりやすく、より深く理解できるよう選ばれた資料が並びました。また、展示資料や関連するWebページを紹介するリーフレットも併せて配布しました。なお、展示資料は、本センター又は健康情報室(アイブラリー)にて現在所蔵しており、引き続き利用することができます。

本センターでは、地域住民の皆さんの健康支援を行っ



ており、今後も様々な展示や企画を予定しています。多くのご来館をお待ちしております。なお、地域住民等の利用案内については、ホームページをご参照ください。

### 研究発表における「伝わる」ポスターの作り方セミナー開催

平成28年8月2日(火)マルチメディア教室Bにおいて、医学情報センター(図書館)主催の研究発表における「伝わる」ポスターの作り方セミナーが開催されました。【写真】

講師には、金城学院大学講師の遠藤潤一氏をお招きして、学会展示やポスター発表など研究発表で使用するポスター作成の講義、実際に作成したポスターを基にした個別指導が行われ、教職員を中心に30名の方が参加しました。

講義の第1部では、発表ポスター作成のポイントについて、レイアウトとビジュアルの二点があると説明がありました。レイアウトには「余白」、「段組」、「整列」、「グループ」があり、それぞれを意識することでテクニックが習得でき、また、ビジュアルには「コントラスト」、「統一」等、見出しや表、グラフ、図等の細かな部分について、不要な要素を削るといったテクニックが紹介されました。



第2部では、講義内容を踏まえ参加者がパワーポイントでポスターを作成した後、できあがったポスターをA3用紙に印刷し、講師に個別指導をして頂きました。

参加者からのアンケート結果では、「非常に良かった・良かった」がほとんどを占めており好評でした。

今後も、医学情報センター(図書館)では、定期的に講習会を行っていく予定です。

## 災害医療研究センター 中川隆教授 平成28年防災功労者防災担当大臣表彰受賞

災害医療研究センターの中川隆教授【写真】が、平成28年防災功労者防災担当大臣表彰を受賞しました。

これは、防災の推進に関して、特に顕著な貢献をした団体又は個人の功績を称え、防災対策の一層の推進に資することを目的として、内閣府が実施するもので、今年度は全国から10個人・11団体が表彰を受けました。

中川教授は、名古屋市・尾張東部地区のみならず愛知県全域の救急・災害医療研体制の確立に向け、教育と検証の要素を組み入れた盤石な体制構築に尽力され、厚生労働省DMAT（災害派遣医療チーム）養成が進む中で、中部ブロックDMAT代表及び日本DMAT検討委員会委員として活躍をしています。また、東日本大震災や熊本地震においては、被災地内支援や愛知県からの医療チーム派遣の調整に努め、伊勢・志摩サミットでも、防災体制の整備に貢献されています。更に第22回日本集団災害医学会（平成29年2月13日～15日）会長としての学術活動もあり、今回の受賞は、このように長年にわたる防



災体制の整備への取り組みが高く評価されたものです。

表彰を受けた中川教授からは「南海トラフ地震への備えが求められる今、私たち医療従事者も市民として何ができるか真剣に考えるときと思います。」との感想がありました。

## 生物学 武内恒成教授 科学研究費助成事業（科研費）審査委員表彰受賞

医学部生物学の武内恒成教授が、独立行政法人日本学術振興会から科学研究費助成事業（科研費）審査委員表彰を受賞しました。

この表彰は、独立行政法人日本学術振興会が科学研究費助成事業（科研費）の審査の質を高めることを目的に、有意義な審査意見を付した第1段審査（書面審査）委員に対し贈られるもので、今年度は全国の約5,700名の第1段審査（書面審査）委員の中から268名が選考され、本学では初めての受賞となりました。

表彰を受けた武内教授からは「私も様々な領域での審査委員をして参りましたが、今回このような表彰を頂き大変光栄です。今後この経験が、本学における若手研究者からの科研費応募に対する助言など、研究活動の振興の一助となれば幸いです。」との感想がありました。



表彰を受けた武内教授（左）と佐藤学長（右）

## 血液内科 内野かおり医員助教 日本血液学会学術集会優秀ポスター賞受賞

本院血液内科の内野かおり医員助教が、平成28年10月13日（木）～15日（土）にパシフィコ横浜で開催された第78回日本血液学会学術集会において、優秀ポスター賞を受賞しました。

同賞は、同会で発表されたポスター発表演題の中から、内野医員助教が発表した「Toll-like receptor genetic variations in bone marrow transplantation」が学術的に高く評価されたものです。

表彰を受けた内野医員助教から「この度、名誉ある賞を頂き大変光栄に存じます。ひとえに高見昭良教授を始め、本研究に関わった先生方のご指導の賜物と厚くお礼申し上げます。今後もより一層努力を重ねていきますので、ご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。」と感想がありました。



内野医員助教（左）と高見教授（右）

## 「教育・研究最前線」

### 医療人としての生涯学習の礎を培う基礎科学部門のご紹介 ～哲学・心理学・外国語～

#### 医療者の育成と哲学教室

哲学 准教授 福井 雅彦

私は哲学分野の研究者で、聖路加国際病院名誉院長の  
日野原重明先生も評価されているイスラエルの哲学者マ  
ルティン・ブーバーの思想を中心に研究しています。

本学医学部では「生命倫理」、「哲学への招待」、「芥川  
龍之介を読む」などの科目を担当しています。特に「生  
命倫理」（医療倫理）は、医療系大学では多くの場合必  
修科目になっていますが、これは医学や医療における研  
究や診断・治療の在り方は常に患者さんファーストでか  
つ人道的でなければならず、こうした視点の理解や習得  
がとても重要だからです。

教養系選択科目「哲学への招待」には、「生命倫理」  
を学んだ上でもう少しその理論的背景を学習したい人向  
けの味付けをしています。「ベンサム」や「カント」な  
ど一見すると敬遠したくなりそうな名前も登場しますが  
、実は双方とも医学・医療の分野と繋がっています。  
例えば、トリアージ (triage) は最大限良い結果を導く  
というベンサムの功利主義の応用ですし、自己決定にし  
てもカントが唱えた人間の尊厳に由来します。また、「芥  
川龍之介を読む」では、毎年17～18作品を取り上げ、  
学生と意見交換しながら輪読していますが、芥川文学は  
誰もが知るように、人間への深い洞察を具えていますか



ら、若い人たちが集中的に読んで決して無駄ではない  
と考えています。

本学において、私のような教員が担う役割は、やはり  
医学や看護学と哲学とを橋渡ししていくことですし、こ  
の確信のもとに日々の研究・教育活動に取り組んでいま  
す。

#### 人を理解・援助するための視点の広がりを目指して

心理学 准教授 宮本 淳

教育では「心理学」、「医用心理学」、「カウンセリング  
入門」の科目を担当しています。また、他の先生方とと  
もに「行動科学」、「初年次医科学セミナー」にも携わっ  
ています。心理学の講義では、人の行動や対人関係を理  
解するための心理学の基礎的な知見や理論を、学生にと  
って身近で関心を抱きやすいテーマや医学・医療に関連  
するテーマと絡めて授業を進めています。

今年度から開講された「行動科学」では、患者心理や  
心理的問題を理解するために発達心理学、臨床心理学な  
どの知見や理論、例えばエリクソンのライフサイクル論  
や各発達段階における心の健康について概説していま  
す。学生が受け身の講義にならないように、クリッカー  
などで対話的な要素を組み込んだり、ジグソー学習で  
USMLE対策に使用されるBRS Behavioral Scienceを学



生同士で教え合うなどのアクティブラーニングの実践を行っています。

研究ではまず、精神分析家のコフォートから始まる自己心理学の観点から、「共感」をキーワードに自己肯定感の回復というテーマについて取り組んでいます。将来、患者・家族とのコミュニケーションや心理的援助に有用な視点の一つとして学生に紹介するだけでなく、学生のメンタルヘルスの問題の予防や兼任している学生相談室

での活動にも活かしていきたいです。

また、初年次教育研究として、剽窃を予防する教育実践効果の分析を続けています。近年、社会的問題の一つにもなっているコピー剽窃に頼ることなく、質の高いレポートが作成できるようなアカデミックスキル教育の在り方について、基礎科学の教員で継続的に検討を重ねているところです。

## 抄読会に胸を張って参加し英語での問診もできる医師を育てる

外国語 教授 山森 孝彦  
准教授 久留友紀子

「外国語」では、英語教育を専門とする教員が英語の授業と英語論文に関する授業を担当しています。医学部1～2学年次を対象とした「医学英語1～3」では、医学・医療のコンテキストの教材を作成し、高校までの教科書的な英語から一歩進んで一般的な英文が読めるようになるための読解力に加え、医療語彙や診察室での会話表現など、実践的な英語力が習得できることを目指しています。

2～4年生向けの論文演習「ジャーナルクラブ1～3」では、論文理解に必要な英語力だけでなく統計やEBMについても学べるよう、英語教員がコーディネーターの

役割を務めて数学・統計の教員、基礎医学・臨床医学の教員と協力した指導体制をとっています。また、課外活動として毎年8月に2泊3日の医療英語キャンプも行っています。【写真】

研究では、現在、英語での医療面接の評価基準（ルーブリック）作成と、社会的コンテキストを意識できる実践的な英語ライティングタスクの開発という2つの科研費研究に従事しています。加えて、昨年「国際交流センター」を兼任し、大学院生・教員に対して英文校正などのサポートをすることも「外国語」の大切な業務となっています。



## 学生ボランティアサークルHIAMU

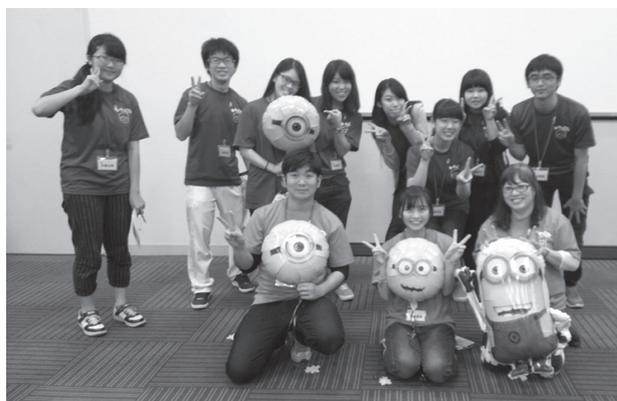
### 「医療ケアを必要とする子どもと家族のための映画上映会」に参加

平成28年10月16日（日）瀬戸蔵（瀬戸市）において、瀬戸市・尾張旭市近郊の医療ケアを必要とする子どもとその兄弟を支援することを目的に映画上映会が開催されました。【写真】

この上映会は、瀬戸旭医師会を始め、瀬戸市の柘訪問看護ステーション、本学の学生ボランティアサークルHIAMUが中心となって、映画館で映画を見たり外で遊ぶことができない子供たちやその家族と一緒に楽しみを分かち合える場を作り、また、訪問看護ステーションのスタッフの方々に小児の在宅医療ケアを学ぶ機会を設けることを目的として企画・運営されています。上映会は今回で3回目ですが、HIAMUも初回から参加しています。

本学からも、看護学部の佐々木裕子准教授を始め、HIAMUの学生が運営スタッフとして参加しました。子どもたちやその家族が安心して大切な思い出作りができるように、学生たちは何度も話し合いを重ね、意見やアイデアを出し合いました。また、映画上映会では、事前アンケートで人気のあった「ミニオンズ」を上映しましたが、配給業者への上映手配から当日の上映運営まで全て学生たちで行いました。その他にも、子どもたちとその兄弟と一緒にできるイベントとして「スタンプラリー」を企画し、子どもたちとともに会場を盛り上げました。

今回イベントの上映部門班長である医学部5学年次生の都築侑介さんからは、「私たちが立ち上げた『もーやっこジュニアの広場』というチームは、様々なひとの妨げ（もやい=繋がり）を作り、かつてはどこにでもあった『ひろば』のような存在でありたいという思いから結成をしました。このような形で小児在宅ケアを広め活性化しようという取組みは日本での例はありませんし、世界でも聞いたことがありません。実際に、現場の看護師



や医師、様々な医療関係者の視点で考え出された一つのモデルだと思います。今後も地域にある小児在宅ケアの現状に光を当てて、少しでも多くの方にその現状に気付いてもらえる場を提供したいと思います。また、このような会に参加できたことは、どのスタッフにとっても良い経験になったと思います。次回の実施は未定ですが、更に大きく良い内容の会になるように頑張りたいです。」と感想がありました。

# 一般財団法人愛知医科大学愛恵会 平成28年度第3回主催公演事業～医大祭とコラボレーション開催～

平成28年10月29日（土）・30日（日）の2日間にわたり、一般財団法人愛知医科大学愛恵会主催の平成28年度第3回公演事業が、第43回愛知医科大学医大祭と合同にて開催されました。

初日には、名古屋音楽大学の学生で結成された「めいおん長唄三味線ガールズ」と杵屋六春講師による演奏が中央棟2階おくすり窓口において行われました。コンサート後は、昨年に引き続き、春日井市出身で今もっとも注目されている若手マジシャンのイリュージョニストDAIKIさんによる「マジックイリュージョンショー」が開催され、観客を交えたユーモラスなマジックから、トランプ、お札、リング等を使った誰も想像つかないマジック、そして、クライマックスでは大掛かりな装置を使った人体交換と、最初から最後まで観客を喜ばせ、感動させるとともに魅せるショーを繰り広げました。

二日目は、尾張旭児童合唱団による合唱が行われ、手話を交えた合唱などかわいらしい歌声をホールいっぱい

に響かせてくれました。続いて行われた、刀根麻理子ミニライブ&歌舞台「ぼっこ」では、今社会問題にもなっている、いじめを題材とした、歌舞台をSKE48研究生の町音葉さん主演で披露され、笑いあり、感動あり、そして、昭和の名曲を観客も交えて、踊って歌っての楽しい舞台を披露頂きました。

また、中央棟2階で開催された体験教室では、アロマによるハンドマッサージ、フラワーアレンジメント教室を始め、絵手紙教室やお茶の美味しい淹れ方教室が連日開催され、多くの参加者で賑わいました。

その他にも、特設コーナーでは、恒例となったJAあいち尾東さんの全面協力を得て産直（野菜）販売が行われ、2日間とも大変好評でした。

今回は、医大祭と合同開催ということもあり、医学部、看護学部学生の実行委員の活躍により、学生によるコンサート等も交えながら行い、大変賑やかな2日間となりました。



コンサート



合唱



ハンドマッサージ教室



歌舞台「ぼっこ」

# 学 術 振 興

## 学 位 授 与

### ◆大学院医学研究科



山本貴和子

学位授与番号 甲第473号

学位授与年月日 平成28年 9月30日

論文題目：「Caregivers of children with no food allergy-their experiences and perception of food allergy（食物アレルギーのない子どもをもつ養育者-食物アレルギーの経験と認識について）」

### ◆大学院看護学研究科



澤田 敦

学位授与番号 第88号

学位授与年月日 平成28年 9月28日

論文題目：「精神科慢性期病棟で働く看護師が患者とのかかわりの中で看護のやりがいを見出すプロセス」

## 本学講座等の主催による学会等

### 【学会名】

- ・第4回脳性麻痺神経学の会
- ・第16回血管外科アカデミー
- ・第26回愛知眼科フォーラム
- ・第41回日本医用マズスペクトル学会年会
- ・第62回日本宇宙航空環境医学大会・  
日本宇宙生物科学会第30回大会合同大会
- ・天然薬物研究方法論アカデミー
- ・第34回日本私立医科大学理学療法研究会学術集会

### 【開催日】

- 平成28年 9月 3日(土)
- 平成28年 9月 3日(土)
- 平成28年 9月 4日(日)
- 平成28年 9月15日(木)～16日(金)
- 平成28年10月13日(木)～15日(土)
- 平成28年10月14日(金)～15日(土)
- 平成28年10月29日(土)～30日(日)

### 【会長等】

- 奥村 彰久
- 石橋 宏之
- 瓶井 資弘
- 妹尾 洋
- 岩瀬 敏
- 松浦 克彦
- 岸川 典明

## 第4回脳性麻痺神経学の会

平成28年9月3日(土)順天堂大学において、第4回脳性麻痺神経学の会を開催しました。脳性麻痺神経学の会は、平成25年(2013年)に始まった研究会で、発達期の脳障害を成人の神経学とは異なる視点で研究することを主たる目的とした会です。脳の発生から成熟の過程で起きた脳性麻痺の神経学的基盤を明らかにすることを大きな目標にしています。

当日は17題の演題発表があり、いずれも興味深い内容でした。演題発表は、全て動画を供覧して行われ、十分

小児科学講座・教授 奥村 彰久

な時間をかけて活発な討議を行いました。日本全国から41名の参加者がありましたが、初参加の方も少なくなく、本研究会の活動が広く知られるようになったと思います。

本合同研究会の開催に当たり、一般財団法人愛知医科大学愛恵会からご支援を頂いたことに深く感謝いたします。また、開催に当たり、本講座関係者及び順天堂大学小児科医局関係者にご協力頂き、心よりお礼を申し上げます。

## 第16回血管外科アカデミー

平成28年9月3日(土)高山グリーンホテル(岐阜県高山市)において、第16回血管外科アカデミーを開催しました。

研究会には、北は北海道、南は九州から、総勢74名の血管外科の先生方に参加して頂きました。ランチオンセミナー1題、特別講演2題、一般演題21題の発表がありました。血管外科分野では、技術の進歩が日進月歩であり、動脈瘤に対するステントグラフト手術、下肢動脈閉塞症に対する血管内治療、末梢動脈へのバイパス術、静

外科学講座(血管外科)・教授 石橋 宏之

脈瘤に対するレーザー焼灼術など新しい治療法が次から次へと開発されており、まさにそのトピックをとらえた大変有意義な学術集会とすることができました。

また、9月の飛騨高山は過ごしやすく、旬の食べ物もあり、特別に企画した世界遺産の白川郷ツアーなど、参加した先生方にも十分満足頂けたことと思います。

最後に、この研究会を開催するに際しまして、ご協力頂きました方々には大変感謝申し上げます。

## 第26回愛知眼科フォーラム

眼科学講座・教授 瓶井 資弘

愛知眼科フォーラムは、本学眼科学講座が主催し、一般眼科医に公開している眼科全般の学会であります。

毎年1回開催を慣行しており、本年度は第26回大会を迎え、平成28年9月4日（日）興和株式会社本社ビル（名古屋市中区栄）において開催しました。

当日は、本学医学部眼科学講座と関連病院から22題の一般演題の発表があり、いずれも高度な眼科医療、高い水準の研究を示すもので、活発な質疑応答もあって盛

でありました。

特別講演では、旭川医科大学の石羽澤明弘先生と京都府立医科大学の木下茂教授の2名をお招きし、それぞれ「OCT angiographyを使いこなすには？」と「自今以後」と題した講演が行われました。

参加者は最新眼科の診断法と治療法について多くの知識を深め、意義ある会とすることができました。なお、参加者は96名でした。

## 第41回日本医用マススペクトル学会年会

法医学講座・教授 妹尾 洋

平成28年9月15日（木）・16日（金）愛知県産業労働センター（ウインクあいち）において、第41回日本医用マススペクトル学会年会を開催しました。

日本医用マススペクトル学会は、今年で記念すべき40周年を迎えました。1976年に医用マス研究会として発足した本学会は、医学に関わる質量分析を用いた研究の進歩・発展を目指し、現在では幅広い分野の研究者が参加し、情報交換をする場となっております。

本年会では、特別講演として慶應義塾大学先端生命科学研究所・所長の富田勝先生をお招きし「メタボローム解析が医療と農業を変える」というテーマでご講演を頂きました。また、シンポジウムでは、3題のテーマを取

り上げました。その一つとして、「感染症診断における質量分析法～現状と課題～」という大変興味深いテーマで、本院感染症科の三嶋廣繁教授、山岸由佳准教授にそれぞれオーガナイザー、シンポジストをお願いしご協力頂きました。更に企業様にはランチョンセミナー、企業展示、テクノロジーフォーラムなど多岐にわたる積極的なご参加を頂きました。一般演題では、47題の申し込みがあり、大変有意義な意見交換ができ、248名の参加の中、盛会裡に閉会することができました。

末筆ながら、本年会の開催に当たり、格別なるご支援頂きました一般財団法人愛知医科大学愛恵会並びに関係者の皆さまに心より厚く御礼申し上げます。

## 第62回日本宇宙航空環境医学大会・ 日本宇宙生物科学会第30回大会合同大会

生理学講座・教授（特任）岩瀬 敏

平成28年10月13日（木）～15日（土）大学本館たちばなホール及び講義室において、第62回日本宇宙航空環境医学大会・日本宇宙生物科学会第30回大会合同大会を開催しました。両学会は、これまで別々に開催されておりましたが、両学会に関与している会員を中心に「一度、合同学会を開催したらどうか。」という提案があり、両学会理事長のご尽力もあってこのたび実現の運びとなりました。

本大会では、宇宙生物科学会30周年記念シンポジウムに加え、特別講演1題、教育講演1題、ワークショップ3題（16演題）、シンポジウム9題（40演題）、ランチョ

ンセミナー2題、一般演題59題のプログラムが生まれ、参加者総数373名の盛会にて大会を終えることができました。特別講演には、日本初の女性宇宙飛行士である東京理科大学副学長の向井千秋先生、教育講演には、前国際宇宙大学教授で現米航空宇宙局のGilles Clément先生をお招きして、ご講演頂きました。

末筆となりましたが、本学会の開催に当たり、多大なるご支援を賜りました本学関係者の皆さま、助成金を頂きました一般財団法人愛知医科大学愛恵会の皆さまに心よりお礼申し上げます。

# 天然薬物研究方法論アカデミー

薬剤部・教授 松浦 克彦

平成28年10月14日（金）生理学研究所コンファレンスセンターにおいて、天然薬物研究方法論アカデミー第19回岡崎シンポジウム及び翌15日（土）には、天然薬物研究方法を考える若手の会を開催しました。

天然薬物研究方法論アカデミーは、漢方薬等天然薬物の基礎研究から臨床研究における方法論をテーマとして、技術の開発や改善に貢献することを目的に設立されました。本会の参加者は、70名を超えるほどで少数ですが、天然物を扱う薬学研究者、臨床薬剤師、医師が集う会となっています。第19回岡崎シンポジウムでは、「生理学・生物学から学ぶ天然薬物研究」基礎研究から臨床へ”をテーマに会長講演、教育講演に続き、「体液調節の生理学から五苓散の作用機序に迫る」と題して、シンポ

ジウム及びパネルディスカッションが催され、天然物の研究方法論について白熱した議論が交わされました。

また、近年この分野の若手研究者が年々減少してきており、その育成が急務となっている中、天然薬物研究方法を考える若手の会は若手研究者の発掘及び活性化を担っています。今回は、15題の研究発表に対して制限時間を超えて多くの質疑が行われました。討論の中から得られた知見を基に、今後の発展とともに新たな天然薬物研究基盤の確立に寄与することを期待したいと思います。

最後になりますが、本研究会が成功裏に終えることができましたことを、多大なご支援を賜りました一般財団法人愛知医科大学愛恵会を始め、関係の皆さまに心から感謝申し上げます。

## 第34回日本私立医科大学理学療法研究会学術集会

リハビリテーション部・技師長 岸川 典明

平成28年10月29日（土）・30日（日）本院において、第34回日本私立医科大学理学療法研究会学術集会を開催しました。

学術集会のテーマは「多職種連携による集中治療～ICUから一般病床まで～」と題して、特別講演に本院周産期母子医療センターの山田恭聖教授（特任）や11B（脳神経外科・脳卒中センター）病棟の小林美和看護師長、JA愛知厚生連海南病院リハビリテーション科係長（理学療法士）の飯田有輝氏といった集中治療領域の第一線で活躍されている多職種の方々からそれぞれご講演頂き

ました。

一般演題は、全国から17題の発表があり、約80名の参加者が活発な意見を交わしました。本院からも5題の発表があり、若手からベテランまで多忙な臨床の中でまとめた成果が報告されており、日々の診療について振り返る良いきっかけになりました。

最後に本学術集会の開催に当たり、多大なるご支援を賜りました本学関係者の皆さまに心より御礼申し上げます。

## 研究助成等採択者

○公益財団法人日東学術振興財団 第33回(平成28年度)研究助成

- 氏名 山崎達也（感染・免疫学講座・助教）
- 研究題目 中和抗体遺伝子発現プラスミドを用いた新規受動免疫法による感染症治療
- 助成金額 1,000,000円

○公益財団法人日東学術振興財団 第33回(平成28年度)研究助成

- 氏名 小松紘司（生理学講座・講師）
- 研究題目 卵巣組織動態のライブイメージング解析による血清の原始卵胞発育誘導促進効果に関する研究
- 助成金額 1,000,000円

○グラクソ・スミスクライン株式会社 2016年度G S K ジャパン研究助成

- 氏名 伊藤卓治（内科学講座（神経内科）・特別研究助教）
- 研究題目 神経筋疾患を標的とした薬剤スクリーニングのためのニューロマスキュラーモデルの構築
- 助成金額 2,000,000円

○公益財団法人大幸財団 平成28年度学会等開催助成

- 氏名 中川 隆（災害医療研究センター・教授）
- 学会名称 第22回日本集団災害医学会総会・学術集会
- 助成金額 300,000円

○公益財団法人大幸財団 平成28年度学会等開催助成

- 氏名 松浦克彦（薬剤部・教授）
- 学会名称 天然薬物研究方法論アカデミー第19回岡崎シンポジウム
- 天然薬物研究方法論を考える若手の会
- 助成金額 130,000円

○公益財団法人大幸財団 平成28年度海外学術交流研究助成

- 氏名 児玉貴光（医療安全管理室・准教授）
- 会議名称 International Conference on Emergency Medical Response and Management of Disaster (国際災害対応カンファレンス)
- 助成金額 97,000円

# 海外研修派遣研修記

本学では、教育、研究活動等の向上に寄与するため、教員の海外研修派遣を実施しています。この度、本院周産期母子医療センターの渡辺員支准教授が海外研修へ参加されましたので、ご紹介します。

## 渡 辺 員 支

(周産期母子医療センター・准教授)

研修課題：妊娠高血圧症候群における血管内皮障害の発症機序の検討

研 修 先：ウイスコンシン大学産婦人科（米国）

University of Wisconsin-Madison School of Medicine and Public Health Department of Obstetrics & Gynecology, Division of Reproductive Sciences Perinatal Research Laboratories

研修期間：平成27年12月1日～平成28年5月31日

私は、平成27年12月1日より半年間、アメリカ合衆国のウイスコンシン州マディソン市にあるウイスコンシン大学に留学する機会を得ました。マディソン市は、アメリカの内陸部にあり、シカゴの北西約200kmに位置する風光明媚でどかな地方都市です。マディソン市は、アメリカの州立総合大学の中でも最大規模で、大学ランキングの上位を占めるウイスコンシン大学マディソン校を有し、20万人強の総人口の中で本部キャンパスの学生が42,000人もいるまさに学園都市で、研究留学するには、冬の寒さが尋常でない（気温が日中でも-15℃ぐらいになることはしばしばあり）こと以外絶好の環境下にありました。

そもそも私が、ウイスコンシン大学に留学できることになったのは、平成21年に仙台で開催された国際学会に参加していた際に、ウイスコンシン大学の産婦人科の中にあるReproductive Sciences, Perinatal Research LaboratoriesのProf. Ronald R. Magnessも出席されており、彼が私と同じ妊娠高血圧症候群の血管内皮障害を専門にされていたことから、私の発表に興味を持ってくれたようで、声を掛けてくれたことが始まりでした。その後、平成26年のニューオーリンズで開催された国際学会でも再会し、留学することになりました。私の研究室のスタッフはアメリカ、コロンビア、メキシコ、中国と多くの国から集まっており、ほとんどのスタッフはMDではなくPhDでした。その中で日本人は私一人で、英語も十分できず、日常生活も苦勞するという状況でしたが、有り難いことにいろいろと親切に面倒を見てくれ、なんとかアメリカでの生活と研究を行うことができました。私はその研究室で、妊娠高血圧症候群の発症機序につき、Estradiol-17 $\beta$ とその代謝物のCatecholamines receptorを介した子宮動脈内皮細胞からのProstacyclin産生能に対する影響について研究を行いました。

この研究は、妊娠羊の子宮動脈内皮細胞を培養して血管内皮細胞からのProstacyclin産生能を見るもので、研究を開始すると細胞培養から始まり、Catecholamine等を細胞に投与、内皮細胞の採取、Prostacyclin産生量測定とほぼ1週間の研究行程を経て結果を出すものでし



Prof. Ronald R. Magness（中央）と私の研究を助けた大学院生のRosalina（左）



ウイスコンシン大学マディソン校の街並からステートストリートの向こうにWisconsin State Capitalが見えている風景です

た。私の場合は、留学期間が半年間と短いため、ボスもスタッフも何とかその期間に結果が出るようにと助けてくれました。おかげで結果も出て、帰る際には大学内の研究会で発表と大変貴重な経験もさせて頂きました。今回の留学では、初めて体験し苦勞して分かることがたくさんありました。まず英語でコミュニケーションが取れないと生活もできません。研究でもカンファレンスにも加われず（実際は参加しているが、理解できず加わっていないのと同じ）話になりません。次に、日本での役職・肩書きなどは何の役にも立たちません。自分の能力と意地だけが頼りです。初めて経験することに何とか対処して、問題を解決していく。これは、日常生活も研究も同じですが、何者にも変えられない大変貴重な経験です。とにかく留学して苦勞した者でないと分からないことがたくさんあります。特に若い時にこの経験をするとは、その後の人生に大変役立つと思います。機会があれば若い医師には是非留学することをお勧めします。

最後に、私に留学の機会を与えて下さった若槻明彦教授及び産婦人科医局員の皆さま、留学の事務的手助けを頂いた庶務課の皆さまにこの場を借りて感謝申し上げます。

## 新シリーズ スマイル

# ～大学・病院を支える笑顔豊かなスタッフ陣～

今号から、新シリーズ「スマイル」がスタートします。

大学・病院を支える笑顔溢れるスタッフを始め、100を超える部署での仕事内容や独自の取り組み等についてご紹介いたします。

### 中央放射線部

中央放射線部は、本院の中央診療部門の一つであり、診療放射線技師61名（メディカルクリニックを含む）と医療技術補助員1名、看護師、事務職員、更に放射線科を始めとする各診療科医師が協働・連携して、高度かつ安全で安心できる医療の提供に努めています。

中央棟1階にある「画像診断センター」では、エックス線撮影、CT、MRI、透視などの検査を行います。診療放射線技師は、放射線被ばくを考慮しながら診断能の高い画像を撮影します。看護師は、造影剤の静脈注射や検査の介助を行い、画像検査の多くは放射線診断専門医が速やかに読影し、診断報告書を作成しています。また、「血管内治療センター」では、血管の閉塞、動脈瘤、腫瘍、出血等を治療するIVRを行います。専門医と診療放射線技師、看護師のチームにより、高度の技術を用いて治療を行っています。

中央棟地下1階にある「核医学センター」では、PET-CT、SPECTなどの検査を行います。放射性同位元素による内用療法も行っています。また、「放射線治療センター」では、最新の放射線治療装置を使用して高精度放射線治療を行います。放射線治療専門医と、医学



物理士や放射線治療専門放射線技師等の資格を持つ診療放射線技師、看護師のチームが患者さんと共に最適な治療を行っています。

更に、高度救命救急センターや中央手術部においては、診療放射線技師が24時間体制で対応しています。画像データの管理や病院内で使用する放射線及び放射線機器等の管理、放射線治療における品質・精度管理等も重要な仕事です。

本院では、各専門分野の認定診療放射線技師、第1種放射線取扱主任者など様々な認定資格を持った診療放射線技師が多く活躍をしています。

### 看護学部

#### 病態治療学 教授・衣斐 達

看護学部は、教員53名（専門基礎科学系4名、看護専門系45名、看護実践研究センター4名）で、学部・大学院・看護実践研究センターの教育・運営を担当しております。私は、専門基礎科学系に属し主に学部教育として、1・2学年次に実施される教養科目群、専門基礎科目群の中の科目の講義・演習を担当しています。これらの科目群では、看護を学ぶ上での基礎教養と人間、健康、環境の理解に関する知識を身に付けます。これらの科目群は、より専門的知識が必要なため、医学部や外部の講師の方々の支援を受けています。

平成18年3月まで、本学医学部内科学講座（神経内科）に所属し、同年4月から看護学部・病態治療学に異動しました。専門領域は神経内科ですが、看護知識を学ぶ基礎としての生きる意味を考える人間学、生命倫理、専門領域以外の内科その他の臨床科目についても病態治療学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、老年看護援助論Ⅱの講義を分担し、小グループでの演習形式の教養ゼミナール演習も担当しております。

看護学部では、学生へのきめ細やかな勉学や学生生活

指導のため、1教員当たり12名前後の学生を受け持つアドバイザー制度があり、私は1・2学年次生を担当しております。他に、大学院教育として高度実践看護学コースの講義・演習と修士論文指導、医学部神経ユニット講義を一部担当しています。



看護学部運営は学部長補佐として、学部長業務を微力ながら補佐するとともに、教授会、教員会議、大学院研究科委員会のほか8委員会に加わっています。また、病院の診療業務として、神経内科外来を1日担当しております。

看護教育の中では、主に前半の教育の一部に携わっているだけですが、看護学部からは患者の疾患治療のためだけの看護でなく、他職種と連携し、患者・家族・社会を含めた幸福を目指す全人的看護を行える看護職者が育って欲しいと願っています。

# 規 則

規則の制定・改廃情報をお知らせします。

## 教員組織規程の一部改正等

本学における教員の組織，選考方法等に関する規定整備に伴い，次の関係規則が整備されました。

施行日はいずれも平成28年8月1日

### 【新規制定】

- ・愛知医科大学教員人事規程
- ・愛知医科大学教員人事委員会規程

### 【一部改正】

- ・愛知医科大学教員組織規程
- ・愛知医科大学教員選考規程
- ・愛知医科大学医学部教員選考規程
- ・愛知医科大学看護学部教員選考規程
- ・愛知医科大学看護学部教員選考基準

## 病院規程の一部改正

愛知医科大学病院規程の一部が改正され，新たな診療科として「病理診断科」が設置されました。

施行日は平成28年10月1日

## 看護実践研究センター認定看護師教育課程設置規程の一部改正等

日本看護協会が定める認定看護師教育機関に係る修了要件の改正及び認定看護師課程学生に係る賞罰の規定整備に伴い，次の関係規則が整備されました。

施行日はいずれも平成28年9月1日

### 【新規制定】

- ・愛知医科大学看護学部附属看護実践研究センター認定看護師教育課程学生の懲戒に関する規程

### 【一部改正】

- ・愛知医科大学看護学部附属看護実践研究センター認定看護師教育課程設置規程
- ・愛知医科大学看護学部附属看護実践研究センター認定看護師教育課程細則

## 公益通報者の保護等に関する規程の一部改正

学校法人愛知医科大学公益通報者の保護等に関する規程の一部が改正され，現行の公益通報窓口において，医療安全管理に関する情報提供についても受け付けることとして，体制が整備されました。

施行日は平成28年10月1日